

知的障害者のQOLを支える教育の在り方に関する研究 —卒業生による学校教育の評価と生活の満足度—

新妻翔太郎^{1)*}・細川かおり²⁾

¹⁾千葉大学教育学部附属特別支援学校

²⁾千葉大学・教育学部

Research on the Nature of Education that Supports the Quality of Life of People with Intellectual Disabilities —Evaluation of School Education and Satisfaction with Life by Graduates—

NIITSUMA Shoutarou^{1)*} and HOSOKAWA Kaori²⁾

¹⁾Chiba University Special Support School of Education

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、知的障害特別支援学校の卒業生を対象に生活調査を行い、卒業生の現状から学校での教育への評価及び教育への示唆を得ることを目的とした。調査を通して、各教科等を合わせた指導をカリキュラムの中心に置き、学習活動をしているX大学教育学部附属特別支援学校において、日常生活面や働く力、非認知能力面の育成に関する強みがあることが明らかになった。反面、学習面に関するスキルや、福祉サービスの知識に関する得点が低くなっていることが明らかになった。卒業後必要と感じた力についても、それらの必要性は低い数値ではあるものの、読み書きにおいては、コミュニケーションの手段や余暇活動での活用が期待され、金銭、数量などについては、自力通勤や旅行での利用、買い物などで活用している自由記述があった。こうしたことから、これらの力を実感を伴いながら育むことが、卒業後のQOLを支えることにつながると考えられた。

キーワード：QOL (Quality of Life), 特別支援学校 (Special Needs School), 知的障害 (Intellectual Disabilities), 教育評価 (Educational Evaluation), 特別支援教育 (Special Needs Education)

1. はじめに

近年、国際連合やOECDといった国際機関において、幸福度指標の作成を通じて、幸福の全体図を描き出そうとする試みが進められている。日本でも、内閣府による「経済財政運営と改革の基本方針2021 (骨太方針)」において、個人と社会全体のWell-beingの実現を目指すことが記載されるなど、人々の幸福感や生活の質の向上とは何かを、改めて考えようとする動きが活発化している。

WHO (世界保健機構) が1948年に提唱した健康の定義「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、信仰の上でも (霊的にも)、そして社会的にも、全てが結びついて満たされている状態 (Well-Being) であること」を始めに、人間らしい生活や自分らしい生活を送るための、個人の満足感や幸福感を尺度としてとらえる概念としてQuality of Life (以下QOL) やWell-Beingといった考え方が、様々な分野で注目されていった。

教育の分野でも、子ども達一人一人が幸福で豊かな人生を自ら創り出していけるよう育てていくことが、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(文部科学省, 2016) や「特別支援学校小学部・中学部学習指

導要領」(2017) の前文で述べられている。加えて、OECDが2015年から進めているEducation 2030プロジェクトにおいて、全人類の繁栄や持続可能性、Well-beingに価値を置くことが求められていくことが述べられるなど、今後の学校教育において重要な視点ともなっている (OECD, 2018: 文部科学省, 2018)。

知的障害者のQOLについて、1960年代に北欧諸国から起こったノーマライゼーション (障害者も健常者と同様の生活ができる様に支援すべき) の考え方をきっかけに、障害者のQOL研究が報告されていく。障害の分野でも、1980年頃からWell-BeingやHappiness (幸福感) が認識されはじめ、QOL, Well-Beingに関する概念や評価法の研究が盛んに行われるようになってきた。教育分野でも、QOLについて研究されてきているが、韓 (2017) は主に障害児のセルフマネジメント教育や医療・福祉分野との関係が強い特別支援教育の領域に関する活動の場面でQOLを用語として用いてきたものが多く、QOL尺度を用いた成果評価やQOLの観点から教育成果を評価することもされてこなかったと指摘している。

知的障害特別支援学校の卒業生の生活調査から学校教育評価をすることを目的とする研究もいくつかある (別府ら, 2010, 野崎ら, 2018)。これらの研究では卒業生の実態から教育の成果を評価することで、今後の教育活動の改善につなげている。例えば別府は、知的障害特別支援学校卒業生のインタビュー調査を通して学校教育の

*連絡先筆者：新妻翔太郎 afsa7721@chiba-u.jp

成果と課題について考察している。その結果、行事活動が印象に残りやすく、行事単元を効果的な学習のために活用することが教育課程改善に向けて示唆された。また、学校時代の働くことに向けた学習が、現在の仕事について卒業生を支えていることが示唆された。しかし、QOLとの関係での検討はされていない。加えて、知的障害特別支援学校における教育課程の編成の視点で重視されていることについて、和田（2019）は「卒業生の実態」や「外部の専門家の視点」などが低い結果であったとしている。

以上を踏まえ、子ども達が学校教育で得られた力を自身の人生や社会生活でどう役立てているのか、また、幸福で豊かな人生を支えるための学校教育とは何かを考えるために、卒業生の生活の実態を把握し、学校教育の成果を評価することが必要であると考え。そこで、知的障害者の現在の生活のQOLと学校教育の成果に視点を置くことで、子どもたちのより良い生活を目指す教育活動の示唆を得られると考え、本研究では卒業後の知的障害者における学校生活経験の成果と課題を明らかにし、生活の質（QOL）の向上を支えるための教育の在り方について考察することを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象・実施時期

X大学教育学部附属特別支援学校を卒業した者443名を対象とした。20XX年3月末から4月中旬に対象者に調査用紙を郵送し、回答後、返信用封筒にて返信してもらった。本人のことについての質問は、本人及び保護者に回答を依頼し、保護者の考えを聞く質問については、保護者のみに依頼をした。

(2) 調査項目

別府ら（2009）、栗林ら（2018）の調査項目を参考に、知的障害者の卒業後の生活の実態について質問項目を選定し、作成した。

アンケートの内容として、Ⅰ「お子さんについて」で5項目、Ⅱ「学校生活経験について」で7項目、Ⅲ「身のまわりのことについて」で7項目、Ⅳ「健康について」で4項目、Ⅴ「余暇について」で9項目、Ⅵ「日中の仕事や作業について」で8項目、Ⅶ「悩みの相談やサービスの利用について」で5項目を設けた。

本研究では、Ⅰ「お子さんについて」、Ⅱ「学校生活について」を分析する。

(3) 分析方法

設問ごとに集計を行った。学校生活経験については年齢、障害の程度別に分析をした。また、自由記述についてはKJ法によって分析をした。

(4) 倫理的配慮

調査にあたっては、収集データの使用範囲や回収した調査用紙の保管場所及び期間、廃棄方法、また、個人情報に配慮し、個人が特定されないよう十分留意すること、研究協力を拒否した場合も不利益にはならないことを文

書にて説明した。調査用紙の返信をもって同意されたものとした。

3. 結果

調査用紙は、443名から住所不定であった76名を除いた367名の内、137名（37.3%）から回収された。そのうち回答に不備があった7名を無効としたため、有効回収は130名（35.4%）であった。

(1) 調査対象の基本属性について

調査者の基本属性についてFig. 1～5に示した。性別では男性が多く84名（64.6%）、女性が43名（33.1%）となっている。年齢は20～29歳が多く、全体の30.8%であった。手帳の区分は「Aの1」の方が36.1%と最も多く、次いで「Bの1」の方が26.2%となっている。主な生活の場は「自宅」の方が71.5%と最も多くなっている。

(2) 学校生活を通して身についたと思う力について

25項目について「あてはまる（5点）」～「あてはまらない（1点）」の5件法で回答を求め、得点化した。回答数130名の内、10名が無回答であったため除き、120名について分析した。

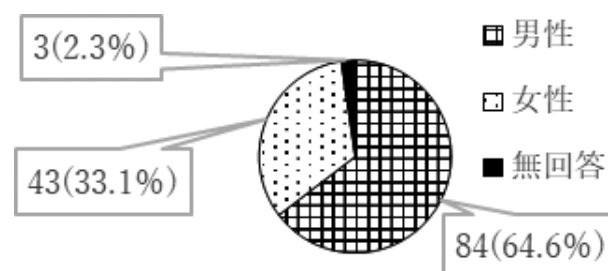


Fig. 1 男女比 (n=130)



Fig. 2 年齢構成 (n=130)

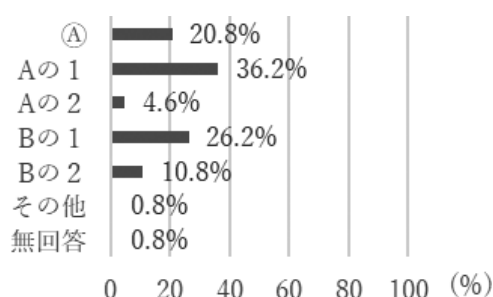


Fig. 3 所持している手帳 (n=130)

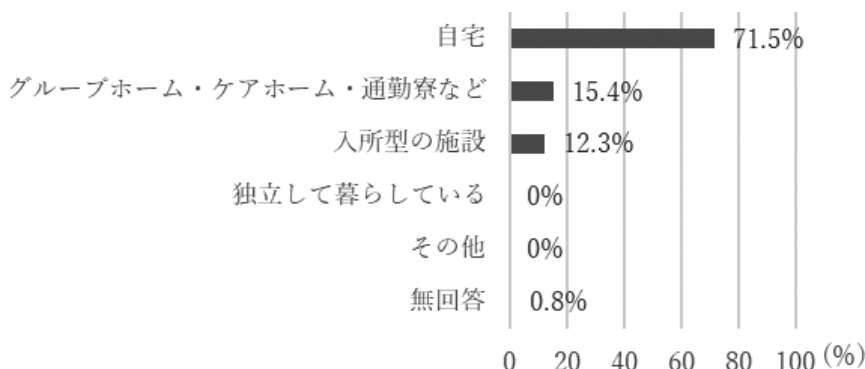


Fig. 4 現在の主な生活の場 (n=130)

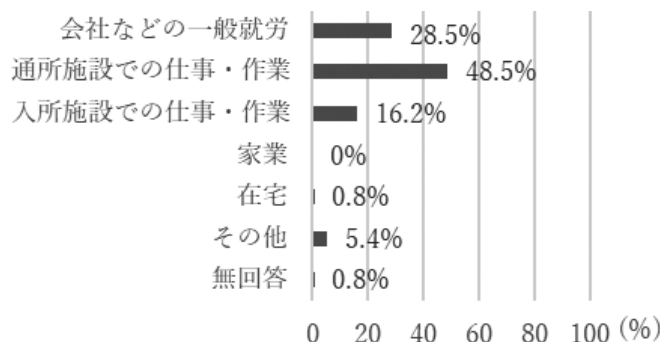


Fig. 5 現在の日中の仕事や作業場所 (n=130)

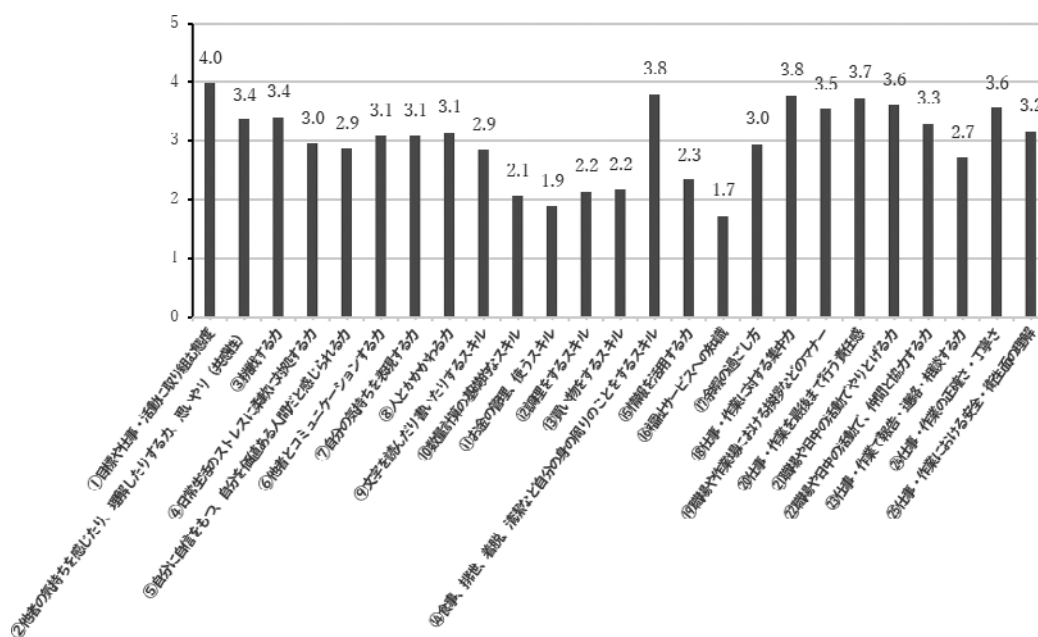


Fig. 6 学校生活を通して身についたと思う力 (n=120)

得点が最も高い項目は「①目標や仕事・活動に取り組む態度」で4.0、次いで「⑫食事、排泄、着脱、清潔など自分の身の周りのことをするスキル」と「⑱仕事・作業に対する集中力」が同数の3.8となっている。得点が最も低い項目は「⑰福祉サービスへの知識」で1.7、次いで「⑪お金の管理、使うスキル」で1.9、「⑩数量計算の基礎的なスキル」で2.1となっている (Fig. 6)。

(3) 年齢、障害の程度別における学校生活を通して身についたと思う力について

年齢別の比較では、19～29歳 (43名)、30～39歳 (31名)、40～49歳 (27名)、50歳以上 (19名) の4群で分けた。回答数130名の内、10名が無回答であったため除き、120名について分析した。

どの年代でも特に低い数値を示した項目は「⑰福祉サービスへの知識」で、高い数値を示した項目は「⑫食事、排泄、着脱、清潔など自分の身の周りのことをするスキル」となっている (Fig. 7)。グラフはどの年代も

似たような推移をしているが、全体的に19～29歳の得点が他の年代より高い数値を示している。

障害の程度別の比較では、A (24名), A1 (43名), A2 (6名), B1 (31名), B2 (15名) の5群で分けた。回答数130名の内、無回答であった10名と、所持する手帳に

ついて無回答であった1名とを除いた119名を対象にした。

障害の程度別の比較では、障害の程度が軽度の群のほうが、より高い数値を示している (Fig. 8)。

所属別の比較では、一般企業 (35名), 通所施設 (58名), 入所施設 (18名) の3群で分けた。回答数130名の内、

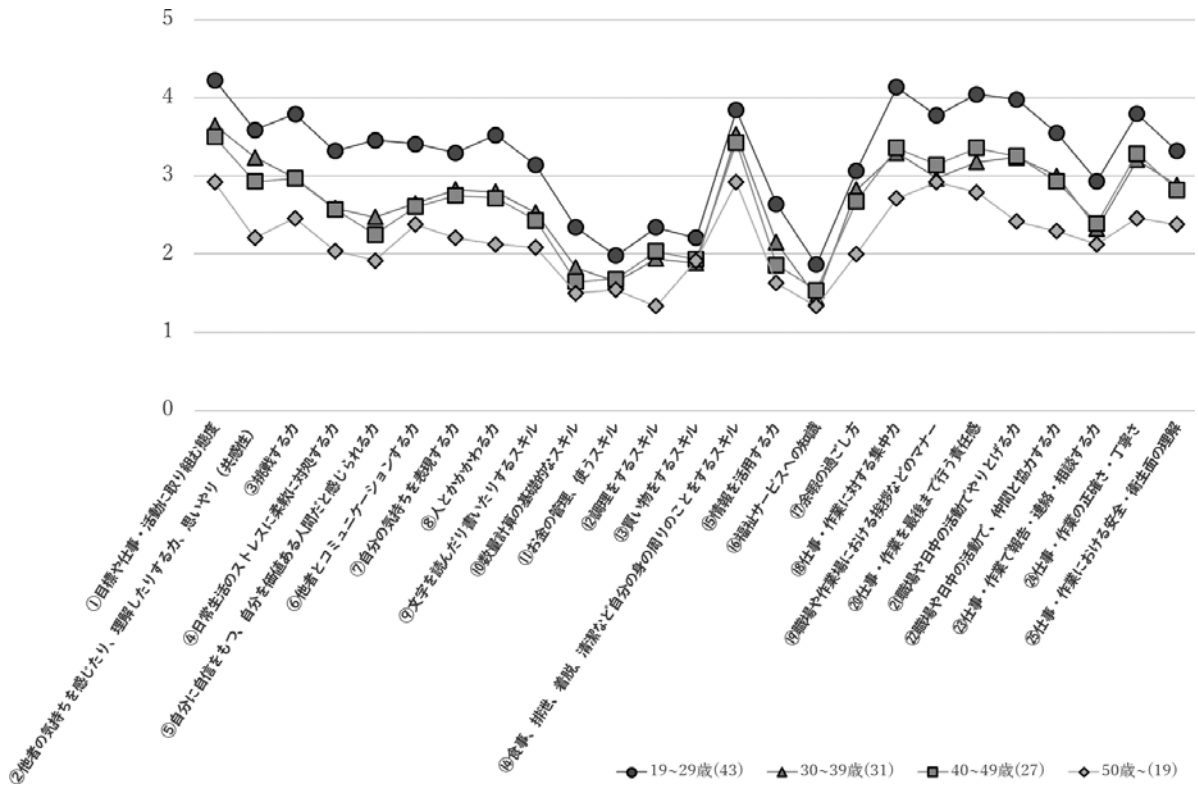


Fig. 7 年齢別における学校生活を通して身についたと思う力 (n=120)

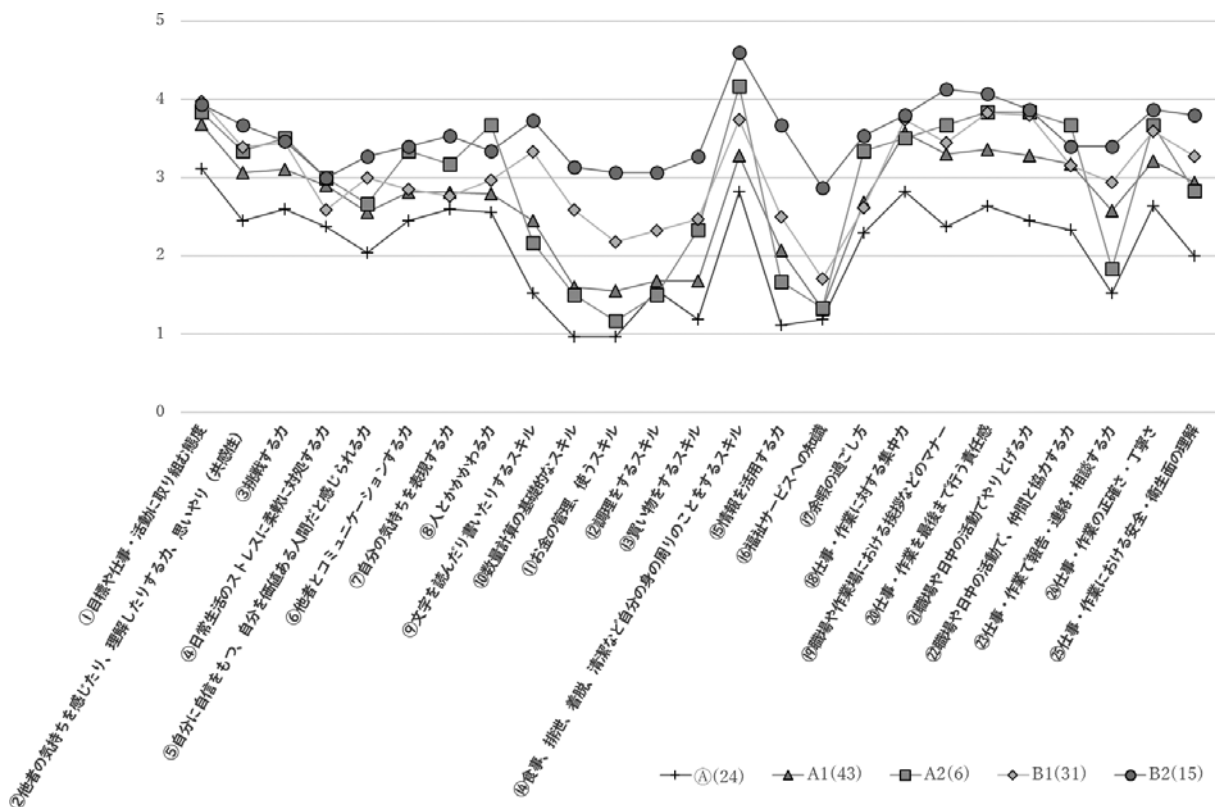


Fig. 8 障害の程度別における学校生活を通して身についたと思う力 (n=119)

無回答であった10名と、所属について無回答であった1名、その他であった7名、在宅であった1名を除いた111名を対象にした。

グラフはほぼ似たような推移をしている。一般企業に勤めている群の方が、より高い数値を示している (Fig. 9)。

(4) 現在の生活と学校生活での経験とのつながりに関することについて

学校生活での経験が現在の生活に活かされていると思

うことについて、自由記述にて回答を求め、まとめたものをTable 1 に示した。特に「校外学習の経験」、「作業学習」に関する経験が多くあった。

学校生活について話題にしたり思い出したりすることについて、自由記述にて回答を求め、まとめたものをTable 2 に示した。特に「作業学習」、「学校行事」に関する思い出が多くあった。

学校生活を通して最も成長したと思うことについて、自由記述にて回答を求め、まとめたものをTable 3 に示した。「身辺自立」や「主体性」に関するものが多くあった。

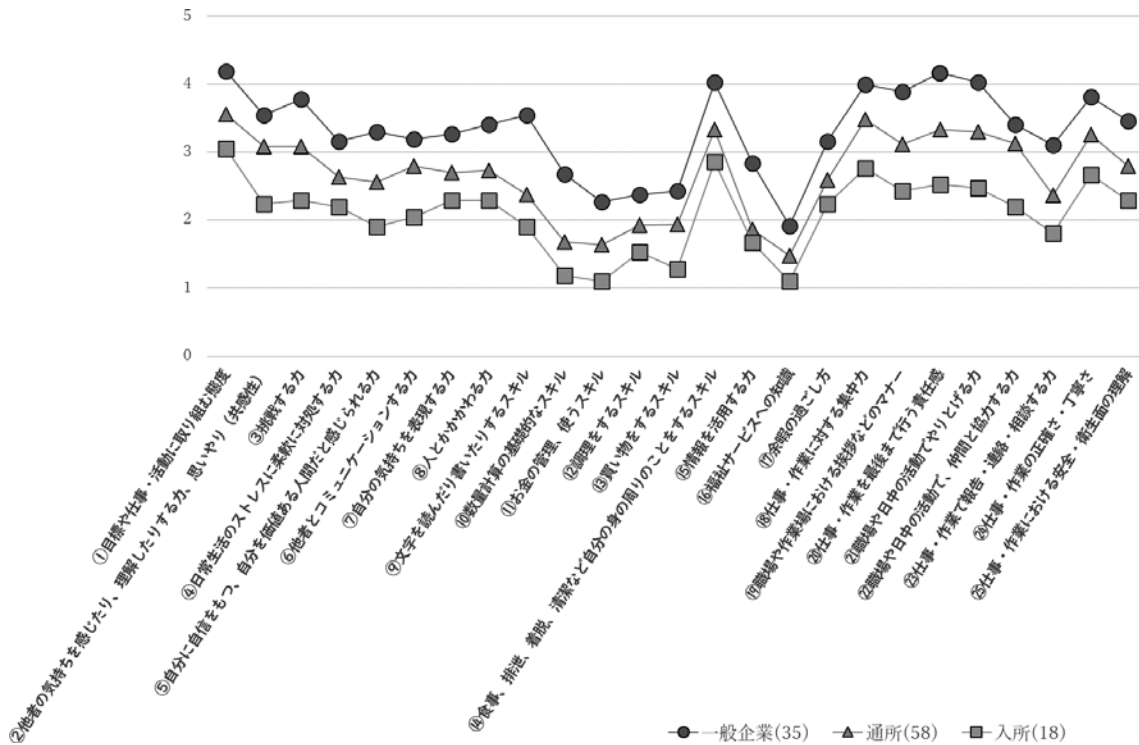


Fig. 9 所属別における学校生活を通して身についたと思う力 (n=111)

Table 1 現在の生活に学校での経験が活かされていると思うことについて

キーワード
「友達との関わり」「目標に向けた取り組み」「日常生活」「集団生活」「音楽活動」「マナー」「習慣」「遊び」「生活の見通し」「調理活動」「役割理解」「校外学習の経験」「作業学習 (忍耐力, 集中力, 作業従事, やり遂げる力, 仲間との協力, 継続, 働く意義, 興味・関心)」「体力づくり」「活動の喜び, 達成感」「班長としての活動経験」「公共交通機関の利用」「生活単元学習」「現場実習での経験」「補助具の工夫」「振り返り」

Table 2 学校生活について話題にしたり思い出したりすることについて

キーワード
「全校での活動」「作業学習」「体育的活動」「友達との関わり」「教師との関わり」「実習での経験」「学校行事」「アルバムや写真」「迷惑をかけた場面」「辛い経験」「食事」「環境の変化」

Table 3 学校生活を通して最も成長したと思うことについて

キーワード
「理解力」「語いの増加」「コミュニケーション力」「身辺自立」「偏食の減少」「自力通学」「対応力」「指示理解・遵守」「生活を整える力」「運動の習慣」「人と関わる力」「自尊心」「人を思いやる力」「体力の向上」「忍耐力」「やり遂げる力」「集中力」「情緒の安定」「環境を把握する力」「主体性」「興味・関心の広がり」「挑戦する力」「友達と協力する力」「集団行動」「リーダーシップ」「社会性」「働く生活の意識」「巧緻性・丁寧さ」「親離れ」「助けを求める力」「気持ちを伝える力」

在学時に学んでおきたかったことについて、自由記述にて回答を求め、まとめたものをTable 4に示した。特に学習面に関することが多くあった。

(5) 卒業後、特に必要と感じた力について

25項目の中から3項目を選択してもらった。

得点が最も高い項目は「⑥他者とコミュニケーションする力」で31.5%であった。次いで、「⑦自分の気持ちを表現する力」で23.8%、「④日常生活のストレスに柔軟に対処する力」で20.8%となっている。「⑫調理をするスキル」、「⑮情報を活用する力」、「⑯福祉サービスへの知識」は0%となっている (Fig. 10)。

(6) 年齢、障害の程度別における、社会に出てから特に必要と感じた力について

年齢別の比較では、年齢別の比較では、19~29歳 (44名)、30~39歳 (34名)、40~49歳 (28名)、50歳以上 (24名) の4群で分けた。

19~29歳では、「⑫仕事・作業で報告・連絡・相談する力」が最も多く、次いで「⑥他者とコミュニケーションする力」や「⑰職場や作業場における挨拶などのマナー」が多い。30~39歳では、「⑥他者とコミュニケーションする力」が最も多く、次いで「④日常生活のストレス

に柔軟に対処する力」や「自分の気持ちを表現する力」が多い。40~49歳では、「⑦自分の気持ちを表現する力」と「⑧人とかかかわる力」が最も多い。50歳以上では、「②他者の気持ちを感じたり、理解したりする力、思いやり (共感性)」が最も多い。全体的にコミュニケーションに関する項目の数値が高い (Fig. 11)。

障害の程度別 (所持している手帳の区分による) の比較では、A (27名)、A1 (47名)、A2 (6名)、B1 (34名)、B2 (15名) の5群で分けた。

回答数130名の内、所持する手帳について無回答であった1名を除いた129名を対象にした。Aでは、「⑦自分の気持ちを表現する力」が最も多く、次いで「④日常生活のストレスに柔軟に対処する力」や「⑭食事、排泄、着脱、清潔など自分の身の周りのことをするスキル」が多い。A1では、「⑥他者とコミュニケーションする力」が最も多く、次いで「②他者の気持ちを感じたり、理解したりする力、思いやり (共感性)」が多い。A2では「⑧人とかかかわる力」が最も多く、次いで「②他者の気持ちを感じたり、理解したりする力、思いやり (共感性)」や「④日常生活のストレスに柔軟に対処する力」が多い。B1では、「⑥他者とコミュニケーションする力」が最も多く、次いで「⑫仕事・作業で報告・連絡・相談する力」が多い。B2では、「⑫仕事・作業で報告・連絡・

Table 4 在学時に学んでおきたかったことについて

キーワード
「ストレスマネジメント」「自己管理」「生活に関すること」「友達との関わり」「人との関わり」「読み書き」「言語」「気持ちを伝える」「数・計算」「時間の理解」「金銭の扱い方」「余暇の過ごし方」「生活の見通し」「働くことの意義」「社会性」「ICTに関すること」「福祉の利用」

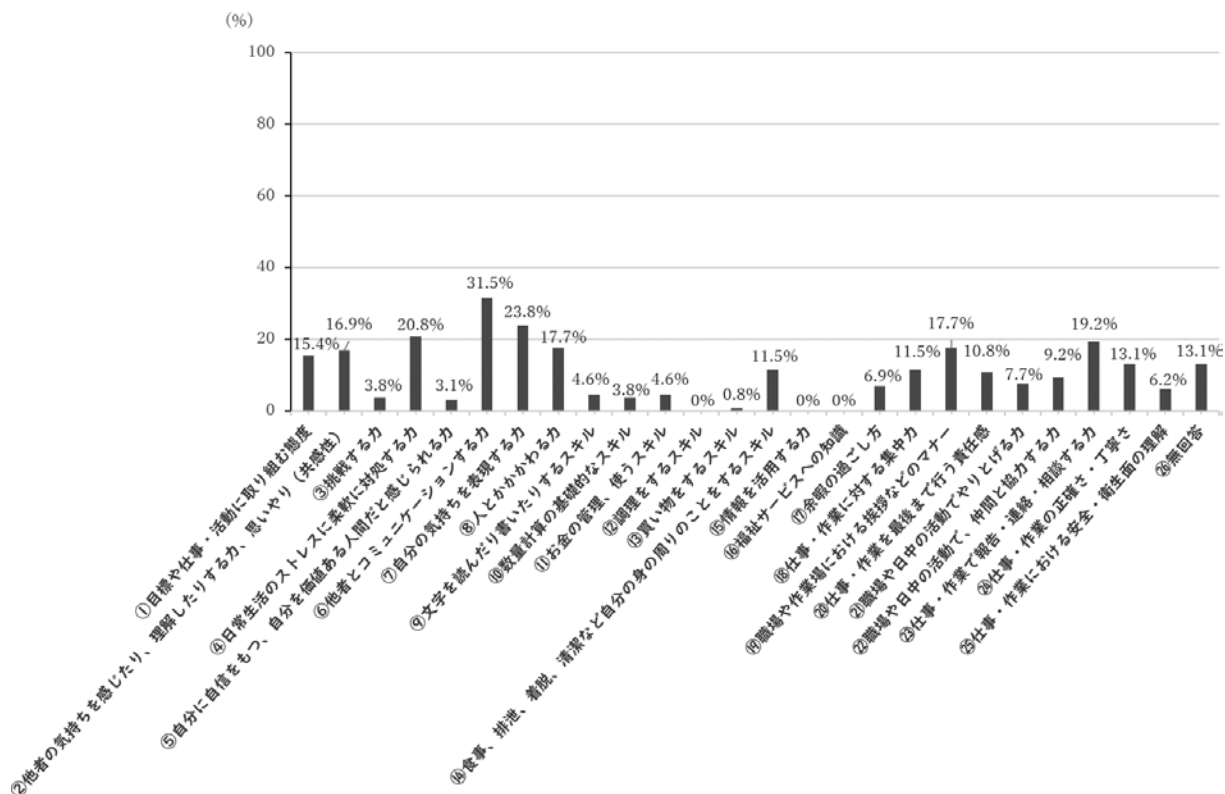


Fig. 10 卒業後、特に必要と感じた力 (n=130)

相談する力」が最も多く、次いで「⑥他者とコミュニケーションする力」や「⑳仕事・作業を最後まで行う責任感」が多い。全体的にコミュニケーションに関する項目の数値が高く、特に障害の程度が重い群の数値が高い (Fig. 12)。

所属別の比較では、一般企業 (37名)、通所施設 (63名)、入所施設 (21名) の3群で分けた。回答数130名の内、所属について無回答であった1名、その他であった7名、

在宅であった1名を除いた121名を対象にした。

一般企業の群では、「㉓仕事・作業で報告・連絡・相談する力」が最も多く、次いで「⑥他者とコミュニケーションする力」が多い。通所施設の群では、「⑦自分の気持ちを表現する力」が最も多く、次いで「⑥他者とコミュニケーションする力」が多い。入所施設の群では、「⑥他者とコミュニケーションする力」が最も多く、次いで「④日常生活のストレスに柔軟に対処する力」、「⑧人と

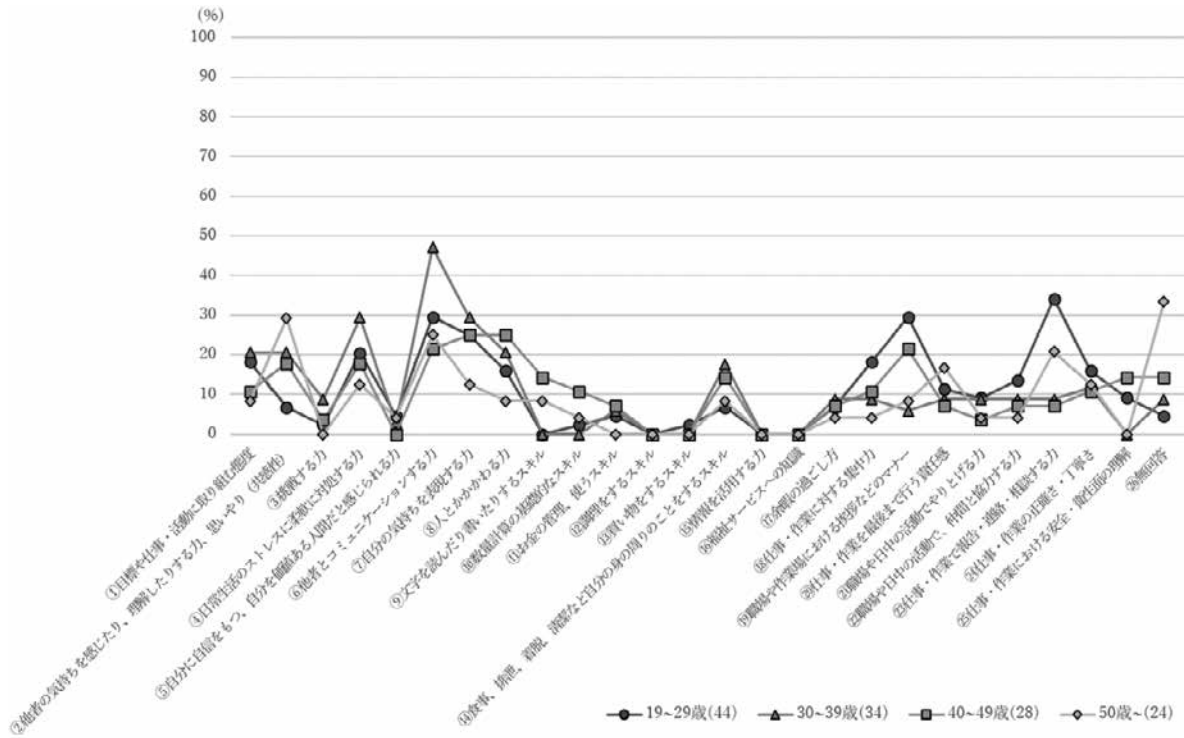


Fig. 11 年齢別における卒業後、特に必要と感じた力 (n=130)

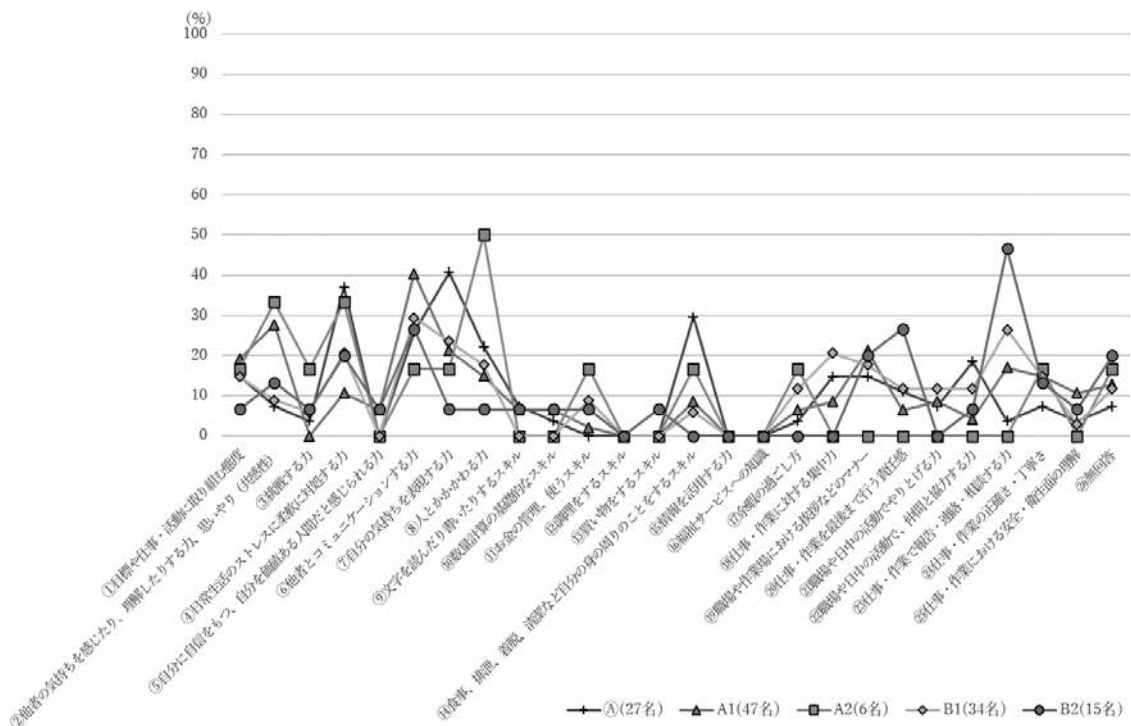


Fig. 12 障害の程度別における卒業後、特に必要と感じた力 (n=129)

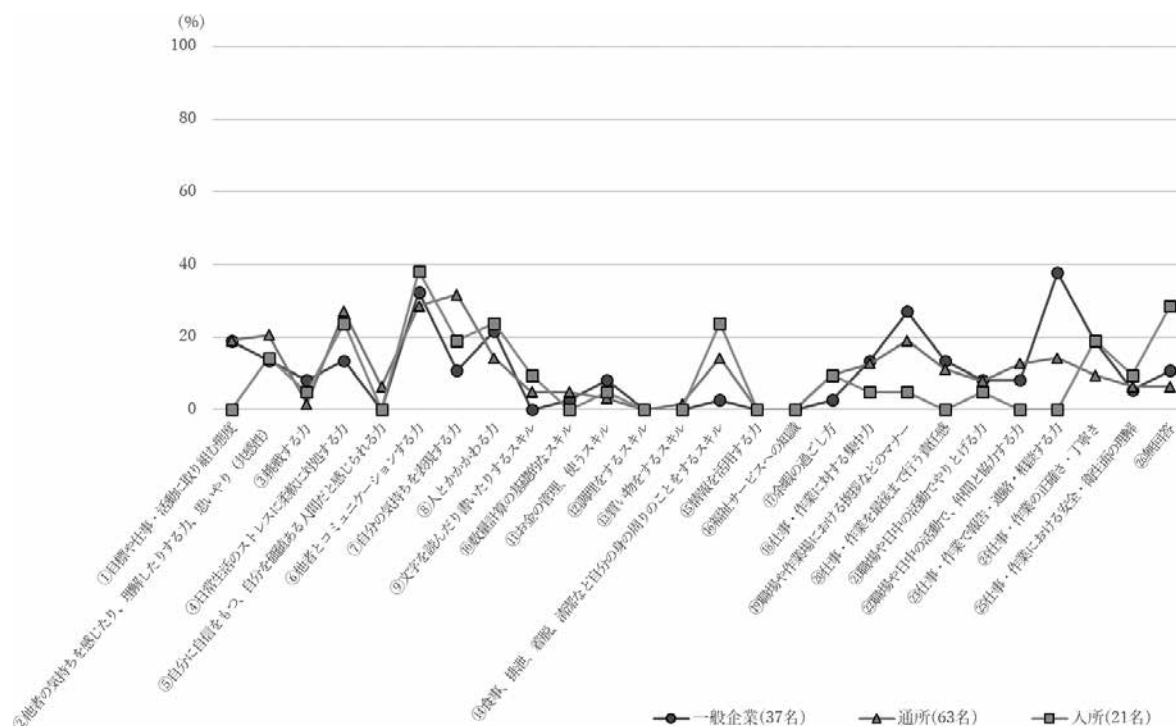


Fig. 13 所属における卒業後、特に必要と感じた力 (n=121)

かかわる力」,「⑭食事, 排泄, 着脱, 清潔など自分の身の周りのことをするスキル」が多い。(Fig. 13)

4. 考 察

X大学教育学部特別支援学校は各教科等を合わせた指導をカリキュラムの中心に置き, 学習活動を展開してきた。主として子どもたちの生活の充実・発展を重視し, ストーリーがある単元展開や生活の中の課題解決をテーマに, どうしたら児童生徒が主体的に授業に取り組むことができるのかといったことを考えてきた。

学校生活を通して身についたと思う力 (Fig. 6) を見ると, 日常生活面や働く力に関する能力の平均得点が高かった。また, 「①目標や仕事・活動に取り組む態度」, 「②他者の気持ちを感じたり, 理解したりする力, 思いやり (共感性)」, 「③挑戦する力」など, 非認知能力面の得点も平均を越えている。

また, 学校生活の思い出 (Table 2) では, 特に作業学習と学校行事に関することが多く挙げられた。現在の生活に学校での経験が活かされていると思うこと (Table 1) においても, 多く挙げられており, 本人及び保護者もそのつながりを実感し, 肯定的に捉えていると考えられる。こうしたことから, X大学教育学部特別支援学校における各教科等を合わせた指導について, 日常生活面や働く力, 非認知能力面の育成に関する強みがあると考えられる。

反面, 学習面に関するスキルは平均得点が低くなっていることが分かった。在学時に学んでおきたことについて (Table 4) においても, 学習面に関する記述が多くあった。その中で, 読み書きにおいては, コミュニケーションの手段や余暇活動での活用が期待され, 金銭, 数量などについては, 自力通勤や旅行での利用, 買い物などで活用しているといった記述がみられた。卒業

後, 特に必要と感じた力について (Fig. 9) においても, 学習面に関する必要性は低い数値ではあるものの, 自立や余暇の充実といった点で活用が期待できると考えられる。そのため, こうした力を卒業生本人の実感を伴いながら育むことで, 卒業後の生活を支えることにつながると考えられた。

また, 卒業後, 特に必要と感じた力について (Fig. 10) 福祉サービスや情報活用の数値は低い, 在学時に学んでおきたことについて (Table 4) の記述において, キーワードとして挙げられた。卒業後の生活を支えるための視点として, こうしたサポートの周知や, 情報を得るための手段の教授といったことが, 今後必要になるのではないかと考える。

付 記

本研究は第一筆者が千葉大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部に加筆, 修正を加えたものである。本調査にご協力くださった方々に心より感謝いたします。

引用文献

OECD (2018) 「E2030 Position Paper」.
[https://www.oecd.org/education/2030/E2030%20Position%20Paper%20\(05.04.2018\).pdf](https://www.oecd.org/education/2030/E2030%20Position%20Paper%20(05.04.2018).pdf) (2023年1月7日閲覧)
 栗林陸美・野崎美保・和田充紀 (2018) 「特別支援学校卒業後における知的障害者の就労・生活・余暇に関する現状と課題—保護者を対象とした質問紙調査から—」
 富山大学人間発達科学部紀要第12巻第2号, 135-149.
 田上幸太・別府さおり・阿部崇・宇佐美太郎・松岡ふみ・

- 居林弘和・本間貴子・伊藤かおり・篠原吉徳・米田宏樹 (2009) 「知的障害特別支援学校卒業生の生活の実態から考える学校教育の課題と教育内容(2)―学校教育に対する評価についての分析を中心に―」筑波大学学校教育論集第31巻, 31-52.
- 内閣府 (2021) 「経済財政運営と改革の基本方針2021」.
<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/cabinet/2021/decision0618.html> (2023年1月7日閲覧)
- 野崎美保・栗林陸美・和田充紀 (2018) 「知的障害特別支援学校に求められる教育課程編成の視点の検討」富山大学人間発達科学部紀要第13巻第2号, 319-333.
- 韓昌完 (2017) 「教育分野における成果評価の観点に基づいたQOL (Quality of Life) の再定義」琉球大学教育学部紀要第90集, 157-162.
- 別府さおり・田上幸太・阿部崇・宇佐美太郎・松岡ふみ・本間貴子・居林弘和・伊藤かおり・篠原吉徳・米田宏樹 (2009) 「知的障害特別支援学校卒業生の生活の実態から考える学校教育の課題と教育内容(1)―調査結果の分析を中心に―」筑波大学学校教育論集第31巻, 21-30.
- 別府さおり・本間貴子・田上幸太・宇佐美太郎・松岡ふみ・居林弘和・西原数馬・伊藤かおり・阿部崇・篠原吉徳・米田宏樹 (2010) 「知的障害特別支援学校卒業生の学習経験の分析―卒業生へのインタビュー調査に基づいて―」筑波大学学校教育論集第32巻, 25-39.
- 文部科学省 (2016) 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/fieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2023年1月7日閲覧)
- 文部科学省 (2017) 「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」.
https://www.mext.go.jp/content/20200407-mxt_tokubetu01-100002983_1.pdf (2023年1月7日閲覧)
- 文部科学省 (2017) 「特別支援学校高等部学習指導要領」.
https://www.mext.go.jp/content/20200619-mxt_tokubetu01-100002983_1.pdf (2023年1月7日閲覧)
- 文部科学省 (2018) 「OECD Education 2030プロジェクトについて」(E2030 Position Paper).
https://www.oecd.org/education/2030/OECD-Education-2030-PositionPaper_Japanese.pdf (2023年1月7日閲覧)
- 和田充紀 (2019) 「知的障害特別支援学校における教育目標と教育課程編成に関する現状―全国調査の結果から―」特殊教育学研究57(2), 95-103.